

二〇二二年度 卒業論文

コピー 顕如の研究 禁 廠

L
1
9
0
0
2
9
加藤真樹

目次

序論 1

本論 2

第一章 若年の顕如 2

第一節 生い立ちと結婚、親鸞三百回忌法要の執行 2

第二節 対朝倉氏との攻防と織田信長の台頭 4

第二章 石山合戦開戦と一向一揆の奮闘 5

第一節 顕如挙兵と信長包囲網 5

第二節 長島一向一揆の奮闘と一度目の和睦 7

第三章 一向一揆の瓦解と本願寺の危機 10

第一節 一向一揆と本願寺 10

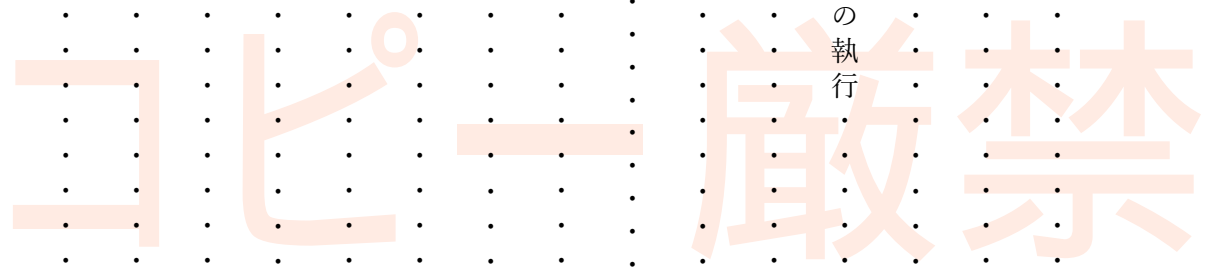
第二節 本願寺の危機 15

第四章 石山合戦終結と晩年の顕如 19

第一節 石山合戦終結と教如との対立 19

第二節 晩年の顕如 21

結論 23



註
参考文献

コピー厳禁

序論

戦国時代、それは全国各地の群雄が覇権を争っていた時代である。ある者は天下統一のため、またある者は自らの家を後世に残すため、またある者は領民を守るために戦った。そんな時代の主人公がだれかと問えば、おそらく多くの人間は織田信長、豊臣秀吉、徳川家康のいずれかの名前を挙げるであろう。中でも織田信長は特に人氣の高い人物であり、彼なしでは戦国時代を語れないと言っても過言ではない。

もちろん、そんな織田信長には多くの戦国大名が立ちはだかった。天下統一を目指す上では仕方のないことであろう。しかし、織田信長に立ちはだかったのは戦国大名だけではない。各地の寺社勢力や一向一揆も大名に劣らぬ脅威であった。その一向一揆を動かし、織田信長と十年にもわたって戦った組織が石山本願寺であり、本願寺十一世宗主が顕如である。高知大学や東洋大学の教授を務めた歴史学者の神田千里氏は、石山本願寺について親鸞の教えを伝える諸宗派のうち、親鸞の子孫が創立した本願寺は、もともとは真宗諸派の中でも弱小な一派にすぎなかったが、応仁の乱の頃から、第八代本願寺住持(本願寺法主とも呼ばれる)蓮如の活動により勢力を伸張した。特に加賀では本願寺門徒が守護代富樫政親を滅ぼして本願寺門徒の一揆、すなわち一向一揆が加賀一国を支配するに至った。有名な加賀一向一揆である。さらに北陸諸国を始め畿内、東海地方にも多数の門徒が居り、彼らの崇敬を集める本山として、また門徒の武力を動員できる政治勢力として、戦国時代には大名にも匹敵する存在となった。

と述べている通り、寺社勢力の一つでありながら、大名にも劣らぬ勢力であった。しかし、前述した織田信長ら

と違い、顕如は世間的に人気があるとは言いがたく、顕如にスポットを当てている文献も決して多いとは言えない。しかし、著名な戦国武将のような派手さはないものの、この時代に滅亡する大名家も多い中、本願寺史上最大の危機といえる戦国時代に本願寺を守り抜き、現在の東西本願寺が存続できたのは紛れもなく顕如の功績である。本論文では、そんな石山本願寺の十一世宗主として、時の天下人織田信長と戦った顕如の人生に沿って掘り下げていく。

本論

第一章 若年の顕如

第一節 生い立ちと結婚、親鸞三百回忌法要の執行

一五四三年(天文十二年)一月六日、本願寺十世証如の長子として大坂本願寺で誕生し、一五五四年(天文二三年)八月十三日、父証如が病没したことにより、本願寺十一代宗主に就任した¹⁾。わずか十二歳での出来事である。それから三年後の一五五七年(弘治三年)四月十七日、十五歳の若さで公家三条公頼の娘で、室町幕府管領細川晴元の幼女であり、当時、近江の戦国大名であった六角義賢の猶子である当時十四歳の如春尼と結婚した²⁾。猶子とは、兄弟、親戚、または他人の子を養って自分の子としたものであり³⁾、当時は他氏族間の結束強化や猶

子となった者の地位上昇の為に行われることが多かった。この結婚について、前述の神田氏が

当時の幕府の中心的名であった細川、六角と本願寺との関係から実現した婚姻であったことは容易に想像できよう。顕如の結婚からは室町幕府体制の一員であるという本願寺の立場がみて取れ、それゆえこれ以後の顕如の社会的立場を象徴するような結婚であった⁵⁾。

と指摘している通り、この結婚によって本願寺が単なる宗教勢力ではなく、幕府にとって重要なピースであることが示されたものであると考える。また、三条公頼には如春尼含めて三人の娘がおり、他の二人はそれぞれ細川晴元、武田信玄に嫁いでいる。注目すべきは、顕如が如春尼と結婚した時点で、顕如と武田信玄が義理の兄弟となった点である。つまり、この時点で信長包囲網の核である武田氏と友好関係が結ばれていたのだ。

また、一五六一年(永禄四年)三月、顕如十九歳の時に親鸞三百回忌法要が行われた⁶⁾。この法要について、同朋大学の教授であり、戦国時代の宗教史を中心に研究している安藤弥氏が

若年期から本願寺の継承者として声明・儀式作法を教え込まれ、本願寺住職となった顕如は教団の儀式主宰者として、親鸞三百回忌という初めての「御遠忌」ともなる盛大な法要儀式を確かに勤めあげた。また、法義をその身に体现し、それを司る存在(「法主」的性格)であった⁷⁾。

と評していることから、若くして本願寺の中心人物としての責任を果たしていると同時に、本願寺を守り切るという今後の顕如の動きに繋がっていった法要であったと考えられる。

第二節 対朝倉氏との攻防と織田信長の台頭

顕如が宗主に就任してから最初の試練は、対朝倉氏との攻防であろう。顕如が宗主に就任した翌年の一五五五年（弘治元年）七月二日、顕如十三歳の頃に本願寺と長年敵対関係にあった朝倉氏が一向一揆が支配する加賀に侵攻する。一度は和睦が成立したものの、一五六四年（永禄七年）九月一日に再び侵攻する。越後の上杉謙信との挟撃も図っていた¹⁰。これに危機感を抱いた顕如は、甲冑を身につけ在陣するように近隣の門弟に命じ、遠方の門弟にも軍費の調達を命じた上で、一五六五年（永禄八年）三月に武田信玄と同盟を結んだ¹¹。武田信玄四四歳に対して顕如二三歳での出来事であった。前節で述べた顕如と如春尼の結婚によって武田氏と友好関係にあったことから実現したことである。その二年後の一五六七年（永禄十年）十一月に当時越前に滞在していた足利義昭の調停によって和睦が成立したが、実は一五六六年（永禄九年）十月にも足利義昭が和睦を要請しており、顕如はこれを謝絶している¹²。顕如はなぜ一五六六年（永禄九年）に謝絶した和睦を、翌年には一転して受け入れたのだろうか。私は、その答えが織田信長の台頭にあると考えている。その理由を述べるために、同年代の織田信長の動きを考察する。

朝倉氏が二度目の加賀侵攻を行っていた一五六四年（永禄七年）、織田信長は隣国美濃の斎藤氏を攻撃しており、顕如が和睦を謝絶した一五六六年（永禄九年）、足利義昭は織田信長に上洛させるため織田と斎藤の停戦を仲介するが失敗する。その後、織田信長は美濃攻めを行うがこれも失敗する。風向きが変わったのは顕如が和睦を受け入れる三カ月前、織田信長は斎藤氏の本拠地である稲葉山城を攻略し、美濃を手中に収めると同時に、城の

名を岐阜城と改め「天下布武」の印判を使用し始めたのである¹³⁰。

以上の点に加え、足利義昭の方から本願寺と朝倉氏の和睦を要請してきたという点、顕如が和睦を謝絶した年と美濃攻めに失敗した年、顕如が和睦を受け入れた年と信長が美濃を平定した年がそれぞれ完全に一致している点から、顕如は織田信長の台頭を踏まえ、万が一信長と対立した場合を見据えて余計な敵を増やさぬように朝倉氏と和睦したと考察する。しかし、顕如は稲葉山城を攻略し美濃・伊勢を平定した織田信長に対して祝辞を送っていることから¹³¹、この段階においてはまだ表向きに対立していなかったことは明記しておく。その後織田信長は足利義昭を奉じて上洛し、足利義昭が室町幕府第15代将軍に就任した。また、織田信長が将軍の後見人となり、その立場を大きくしたのである。

第二章 石山合戦開戦と一向一揆の奮闘

第一節 顕如拳兵と信長包圍網

その後も顕如は織田信長と良好な関係であった¹³²。だが、一五七〇年(元亀元年)七月二一日、顕如二八歳の頃、織田信長が本願寺に近い野田・福島で拳兵していた三好三人衆¹³³らを討伐するため攻撃を仕掛けていた九月一二日の夜、顕如は突如拳兵し、織田軍を急襲した¹³⁴。十年にわたる石山合戦¹³⁵開戦である。なぜ顕如は良好な関係であったはずの織田信長を突如急襲したのだろうか。私は、顕如が織田信長に敵対したというよりは、

織田信長と三好三人衆を天秤にかけ、三好三人衆に味方した結果であると考ええる。神田氏が

それでは何故本願寺が義昭・信長軍に攻撃を仕掛けたのか、最大の理由は義昭・信長と戦う三好三人衆に味方したことだと考えられる。もともと本願寺は三好三人衆と親密な関係にあった。奈良・大坂・堺の本願寺門徒たちが、「一向宗」禁制の地である大和国に道場を建てようと試みた時に三好三人衆の一人岩成友通が力を貸そうとした（『多聞院日記』永禄十一年二月十一日条）。奈良の寺社の激しい反対にあって実現しなかったものの、三好三人衆の好意的な反応があったことが知られる¹⁹⁾。

と指摘しており、このケースと類似する例に、一五七〇年（元亀元年）に織田信長が朝倉義景を攻めた際、織田信長と同盟関係にあり、朝倉義景とも良好関係にあった浅井長政が織田との同盟を破棄し、朝倉義景を攻める織田信長の背後を急襲した例がある²⁰⁾。このことから、顕如が織田信長を急襲したことは不自然なことではないだろう。さらに、歴史家で戦国史を専門としている谷口克広氏が

すでにこの月の六日、本願寺の法主顕如は、近江中部（湖東の犬上・神崎・蒲生三郡）の門徒に宛てて、無理難題を懸けてくる信長と戦うように、との檄文を送っていた。さらに十日には、信長の敵浅井氏と懇意にする旨の書札を通じていた。野田・福島を奪ったなら信長は、すぐ近くの石山本願寺の開け渡しを要求してくるにちがいない。そうした危惧が顕如をして、信長に反抗する決意を固めさせたのだろう²¹⁾。

と指摘している点、および本稿の第一章第二節の考察から、顕如は織田信長と戦うことを想定していたことが考えられ、織田信長が戦っていた場所が本願寺に近い野田・福島であったため、この点からも顕如が織田信長を襲

撃したことは不自然ではないと考えられる。

本願寺拳兵によって三好三人衆討伐は失敗に終わった上、浅井・朝倉の拳兵によって重臣である森可成が討死し²²、織田信長は四面楚歌となった。信長包囲網の始まりである。

第二節 長島一向一揆の奮闘と一度目の和睦

その後織田信長は三好三人衆討伐を断念し、浅井・朝倉連合軍に兵を進めた。これに対し浅井朝倉連合軍は決戦を避け、浅井・朝倉に味方した比叡山に陣を張った。織田軍が三ヶ月近く釘付けにされる志賀の陣の始まりである²³。この間顕如に目立った動きはないが、織田領の長島で顕如の蜂起に呼应し、一向一揆が起こり、長島に近い小木江城を攻め、十一月二日には小木江城を守る織田信長の弟織田信興を自害に追い込んだのである²⁴。これを受け織田信長は一五七一年(元亀二年)五月一二日、五万の大軍を率いて第一次長島一向一揆攻めを行うも一向一揆方の守りは堅くまともに攻めることができないどころか、退却する際逆に向一揆方の追撃を受け、家臣の氏家卜全らが討死する大敗を喫した²⁵。

このような本願寺門徒と織田信長の戦いは行われたものの、顕如と織田信長の直接の戦闘は前述した織田信長急襲以降、一度目の和睦まで行われなかった。そして、一度目の和睦が結ばれるわけだが、一五七二年(元亀三年)十一月ごろに足利義昭の意向を受けた武田信玄の仲介で結ばれたという説²⁶と、十五七三年(天正元年)十一月までに結ばれたという説²⁸がある。私は後者の説が正しいと考える。根拠は、顕如を取り巻く状況の違

いにある。

まず、前者の説における顕如を取り巻く状況を考察する。谷口氏が

表面的には平穩無事なようだが、その実、事態はますます悪化していた。將軍義昭との確執はさらに深まっていた。畿内では、松永久秀・三好義継が信長から離れて、長年の仇敵だった三好三人衆と結んでいた。本願寺も近江の門徒に命令して、反信長の一揆を蜂起させている。この一月には、甲賀群に逼塞していた六角氏が一揆と連合して湖近辺まで進出し、金森・三宅両城に立て籠った。越前の朝倉、江北の浅井に加えて、畿内の半分は敵、本願寺を敵に回しているため近江の湖南ですらままならないというのが、当時の信長の状況だった³⁰。

と指摘しているように、顕如にとって和睦を結ぶ必要性のない、圧倒的有利な状況であった。さらに九月には包圍網打開のため五万の大軍を率いて浅井の本拠地小谷城を攻めるも落とせず³¹、十月七日には和睦を仲介したはずの武田信玄が織田信長と同盟を結ぶ徳川家康領へ出陣したのである³²。このような状況で顕如が織田信長と和睦すると織田信長を助けてしまうことは言うまでもない上、徳川領へ出陣したばかりの武田信玄が和睦を仲介したという点も極めて不自然だ。十五七二年(元龜三年)十一月に武田信玄が和睦を仲介したならば、武田信玄は十月に徳川領へ出陣し、十一月に顕如と信長の和睦を仲介した後、十二月に三方ヶ原の戦いで織田・徳川連合軍を打ち破った³³ということになり、武田信玄は出陣した後、わざわざ織田信長に有利になるように本願寺との和睦を促してから、自分が織田・徳川連合軍と戦ったということになる。以上の点から、十五七二年(元龜三

年)十一月に足利義昭の意向を受けた武田信玄の仲介で和睦が結ばれたという説は誤りだと考える。

次に、後者の説における顕如を取り巻く状況を考察する。一五七三年(元龜四年)も依然として信長包围網が有利な状況であったが、四月十二日の武田信玄の病死³⁵⁾によって潮目が変わる。谷口氏は、武田信玄の死について「信長がピンチを脱したというのはやや大雑把だが、強敵の死がその後の信長の行動を速やかにしたのは確かである。」³⁵⁾と指摘している通り、織田信長はまず、かねてから対立していた足利義昭を七月十八日に追放し、朝倉氏を八月二十日に滅亡させ、浅井氏を九月一日に滅亡させた³⁶⁾。顕如は逆に追い込まれてしまったのである。また、織田信長も浅井・朝倉を滅亡させた直後に第二次長島一向一揆攻めを行うも再び敗れていること

³⁷⁾、武田信玄が病死したとはいえ武田氏は健在であること、畿内に反信長勢力がまだ残っていることから、織田信長にとっても有意義な和睦であるといえる。よって、一五七三年(天正元年)の十一月までに和睦が結ばれたという説が正しいと考える。

しかし、後者の説を選択する場合、顕如にとって圧倒的優位な状況であった石山合戦開戦直後から一五七二年(元龜三年)の間に顕如と織田信長の戦闘が行われていない点は極めて不自然であるため、なぜ顕如は織田信長に攻撃しなかったのかを考察する必要がある。私は、当時はまだ足利義昭が織田信長方であったため、織田信長に表立って攻撃を仕掛けると、幕府、およびその上にいる朝廷を相手にすることになり、賊軍となってしまうためだと考える。足利義昭は顕如が挙兵してすぐ、朝廷に顕如と足利義昭、織田信長の停戦を求める綸旨を発給するように依頼している³⁸⁾ことから、朝廷の権威は衰えていなかったことがわかる。また、開戦直後の一五七〇年

(元龜元年)十月三十日に本願寺と関係の深い青蓮院尊朝法新王が本願寺に和睦を勧めている点³⁹⁾も、顕如が表立って動けなかった原因の一つであろう。ただし、表立って動いてはいないものの、裏では諸大名や各地の門徒と連絡を取っていることから、顕如のしたたかさが見える。

顕如と織田信長の和睦成立後、織田信長は畿内の反信長勢力である三好義継を攻めて自害に追い込み、松永久秀を降伏させ、畿内を制圧した。

第三章 一向一揆の瓦解と本願寺の危機

第一節 一向一揆と本願寺

この章では、織田信長が本願寺攻めに至るまでの過程について述べるが、その前に宗教勢力でありながら信長包囲網の一角を担った一向一揆はどういったものなのか、また、織田信長はなぜ後述する長島一向一揆に対する大量殺戮を行ったのか、この二点を考察する必要があるだろう。

まず、一向一揆とはどういったものなのかを考察する。一向一揆とは、浄土真宗本願寺派の門徒による一揆である。神田氏が「すでに証如の時代から本願寺では、各地の門徒らの行動はその国の大名やその地域の領主に従うものとの原則を立てていた。」⁴⁰⁾と指摘している通り、主に圧政を行う大名に対して行った国一揆とは性質が違うことがわかる。では、どのような場合に発生するのか。それは、浄土真宗の総本山である本願寺が滅ぶ可能

性がある時だと考察する。神田氏が

しかし本願寺が例外的に諸国の門徒に武装蜂起を指令することもあった。(中略)そして元亀元年九月の蜂起には、諸国の門徒に対して、織田信長が本願寺を破却すると通告したと告げ、親鸞の教団が滅びることのな
いよう本山に忠義を尽くせと命じていた⁴¹⁾。

と指摘するように、特に織田信長と対立していた頃の一向一揆は教団存続のために行っているとみていいだろう。

次に、織田信長はなぜ長島一向一揆に対する大量殺戮を行ったのかについて考察する。この大量殺戮を行った理由として今日までに考えられている説は、顕如へのパフォーマンスであるという説と、弟である織田信興を殺された上二度にわたって鎮圧に失敗した恨みと恐れからであるという説がある。

一つ目の説について考察する。こちらの説は正しいと考えて問題ないだろう。神田氏が、大量殺戮を行うパフォーマンスの効果について

形態は極めて残虐ながら、殺戮そのものが目的ではなく、あるアピール制のある戦法であることは、たとえば伊達政宗が無差別殺戮の後、敵方の五カ所が続々と帰服してきた、と誇っていることからもうかがえよう

42°

と指摘していることに加え、織田信長自身も一五七一年(元亀二年)の比叡山延暦寺焼き討ちや、一五八一年(天正九年)の第二次天正伊賀の乱にてパフォーマンス目的の大量殺戮を寺社勢力や一揆勢に対して行っていること

に加え、神田氏が

相手に対する皆殺しの掃討は、相手を文字通り殲滅する目的によりなされるわけではなく、ある種のアピールであることは、例えば羽柴秀吉が行った上月城（この場合）の場合からも（中略）荒木村重の有岡城の場合からも推測

されることである⁴⁴

と指摘していることから、大量殺戮は大名や宗教勢力などを問わず、どの敵対勢力に対してもパフォーマンスとして有効な手段と見て行っており、長島一向一揆に対する大量殺戮についても、顕如へのパフォーマンス目的で行ったという説は正しいと考えられる。また、神田氏が

織田軍が長島一向一揆の大量の血を流したことは確かであるが、目的はその血の分量ではなく、この行為が民衆にアピールする内容である。天正元年四月の、上京焼討の場合と同様に、住民の遺恨は殺戮を行った信長にではなく、それを許した長島一向一揆のほうに向うだろう。一向一揆につき従った民衆の末路はこのようになる、そのアピールが信長の大量殺戮なのである。（中略）大量殺戮により織田領内の民衆が一向一揆から離れていくだろう、というのが信長の計算であったように思われる⁴⁵。

と指摘するように、大量殺戮は残虐な方法ではあるものの、顕如だけでなく織田領内の民衆に対する絶大なアピール効果があったと考えられる。

二つ目の説について考察する。こちらの説について、谷口氏は

一向宗門徒の鬼気迫るばかりの執念を目のあたりにして、信長は信仰の力の恐ろしさを改めて感じたにちがいない。夜叉と化して一気に二万人を焼き殺した陰には、敵を跡形なく抹殺しようという宗教戦争の残酷ささえ感じさせる⁴⁶⁾

と指摘しているほか、歴史家で一向一揆を専門とする竹間芳明氏は、長島一向一揆鎮圧の翌日付の書状⁴⁷⁾から「私怨ではなく天下のために一揆を退治したと述べているが、本音は信長自身が言及しているように、気を散ずる〓鬱憤を晴らすことであつた。⁴⁸⁾」と指摘しており、専門家の間でも長島一向一揆に対する恨みや恐れからの大量殺戮であるという見方が根強い。しかし、私は恨みと恐れを分けて考える必要があると考える。恨みと恐れという異なる二つの感情を、まったく同一の感情として扱うことは難しいため、二つ目の説をそれぞれ長嶋一向一揆に対する私怨説と恐怖説に分けて考えることにする。

まず、私怨説について考察する。私怨説の根拠として、本稿第二章第二節で述べた通り、織田信長は長島一向一揆で弟である織田信興を失っていること、長島一向一揆における大量殺戮まで、長島一向一揆征伐に二度も失敗していることが挙げられるが、織田信長が私怨で長島を攻撃したとする資料は特にない点、前述した比叡山延暦寺焼き討ちや後述する越前一向一揆に対してもほぼ同様の対応を行っている点、長島一向一揆が織田信長に反発するきっかけを作った頭如が最終的には赦免されている点から、織田信長が私怨で大量殺戮を行ったという説は誤りだと考える。

次に、恐怖説について考察する。恐怖説の根拠も、私怨説と同様のものであり、一向一揆への恐怖から大量殺

戮を行ったと直接書かれている資料は存在しない。しかし、私は織田信長がパフォーマンスのためだけでなく、長島一向一揆に対する恐怖感から大量殺戮を行った恐怖説はある程度正しいと考える。根拠は、一向一揆特有の性質にある。大谷大学准教授であり、一揆を専門に研究している川端泰幸氏が、同じ一向一揆である越前一向一揆、加賀一向一揆の一揆衆の目的について

北陸地域の一向指導者であった下間氏や七里氏には、加賀や越前の一揆持ち体制を維持しようという目論見があったかもしれないが、一揆に加わった大勢の門徒たちは、おそらくそのような目的を持っていたわけではない。彼らを一揆に加わらせたのは、おそらくは門主の御書による本願寺の危機を何とかせねばならないとする呼びかけであっただろう⁴⁹。

と指摘しているように、一向一揆衆の目的は、大名の軍勢や他の種類の一向衆の目的である自らの住む土地を守る、年貢の軽減を求めるといった織田信長が解決可能な目的ではなく、本願寺の危機を救うため仇敵織田信長を倒すというものであり、顕如が降伏しない限りは織田信長には解決不可能なものであった。川端氏が「信長にとって彼ら「一揆原」「雑人原」による抵抗こそ、得体の知れない、どう表現してよいかわからない、またどう処断すればよいのかもわからないものだったのではないだろうか。」⁵⁰と指摘している通り、織田信長にとって一向一揆の他勢力と違った特異さが得体のしれなさ、恐怖感に繋がったことは明白である。しかし、前述した通り織田信長の大量殺戮は対宗教勢力に限ったものではないため、長島一向一揆に対する恐怖感のみで大量殺戮を行ったとはいえず、あくまでもパフォーマンスが主目的であったと考えられる。

まとめると、織田信長が長島一向一揆に対する大量殺戮を行った理由は、顕如をはじめとした織田信長の敵対勢力と民衆に対するパフォーマンスでありつつ、長島一向一揆衆に対する恐怖感からくるものでもあったと考察する。

この節では一度、顕如を慕う一向一揆について掘り下げたが、第二節からは再び顕如の人生に沿って掘り下げていく。

第二節 本願寺の危機

和睦した顕如が再度挙兵するまで、そう時間はかからなかった。一五七四年(天正二年)四月二日、一月におこった越前一向一揆を受けて顕如が挙兵した⁵¹。挙兵した理由について谷口氏は「わずか三日前の三月二十八日に、信長が奈良で東大寺の名香蘭奢待を切り取っているから、あるいは將軍になったかのような彼の振る舞いに憤ったの行動だったのかもしれない。」⁵²と指摘しており、顕如にしては珍しく計画性のない挙兵であったものの、これまで足利將軍家の人間しか切り取っていない蘭奢待を、よりによって足利義昭を追放した織田信長に切り取られることは、本稿第一章第一節で述べた通り室町幕府体制の重要なピースであった本願寺にとっても屈辱的な出来事であったに違いない。翌年十月になると、早くも和睦を余儀なくされる⁵³。理由は二つあり、一つは1度目の和睦と同じく、顕如を取り巻く状況が悪化したこと、もう一つは織田信長の敵対勢力に対する容赦のない姿勢である。

まず、顕如を取り巻く状況の悪化について考察する。顕如が挙兵した時点で武田氏と長島一向一揆は未だ健在であり、織田領となっていた越前は前述した通り一向一揆によって本願寺側となったことに加え、挙兵した際本願寺に呼応して河内高屋城も反織田信長の動きを見せた⁵⁶⁾。しかし、長島一向一揆と越前一向一揆は織田信長の大量殺戮によって壊滅し、高屋城は一五七五年四月に落とされ⁵⁷⁾、武田氏は一五七五年(天正三年)六月二八日に起きた、かの有名な長篠・設楽原の戦いで大敗し大幅に弱体化してしまったのである。このような状況では到底戦えないことは想像に難くない。

次に、織田信長の敵対勢力に対する容赦のない姿勢について考察する。抵抗を続ける長島一向一揆に対して、織田信長は一五七四年(天正二年)七月十三日に総勢七万の大軍を出陣させ、一揆勢を長島城、中江城、屋長島城の三つの城へ追い込み、兵糧攻めを行った⁵⁸⁾。その後の経過について谷口氏が

思った通り三城の兵糧は尽き、餓死者が続出した。九月二十九日、本城である長島が籠城している者の助命を条件に開城を求めてきた。二ヶ月半の籠城に疲れ、食糧不足でやせ衰えた農民たちは、それでも命を助けるとの約束を信じて城を出、それぞれ小舟に乗って退散しようとした。まさにその時、信長軍より鉄砲が彼らに向かって乱射されたのである。続いて信長軍の兵が襲いかかり、残った者たちを次々と斬り倒した。

(中略)残された中江・屋長島城の周囲に逃亡防止の柵を築き、放火を命じたのである。四方より放たれた火はたちまちに二つの城を包み、地獄絵の中で二万人もの農民が焼き殺されたという⁵⁹⁾。と解説している通りの織田信長の本願寺方に対する容赦のない姿勢が、大量殺戮パフォーマンスになったことは

本稿第三章第一節で述べた通りであるが、興味深いのは越前一向一揆の際の一揆衆と織田信長の動きである。

越前一向一揆は、もともとは織田信長の命令で越前の行政・軍事を事実上担当していた朝倉家旧臣の桂田長俊に反発した者たちによる土一揆であったが、新たな支配者となった富田長繁に反発した勢力が、隣国である加賀一向一揆と結んだことにより発生した反織田信長勢力である⁵⁸ため、明確に織田信長に敵意を向けていた長島一向一揆と違い、一揆衆の目的は越前の支配者に善政を求めるためにおこした土一揆に近い性質であったといえる。加賀一向一揆が介入した一五七四年(天正二年)二月から、ほどなくして越前は加賀一向一揆の支配下に置かれた⁵⁹。だが、忠誠心が高く、織田信長を苦戦させた前述の長島一向一揆と違い、大阪から派遣された本願寺の家臣や加賀一向一揆から派遣された指導者の圧政に対して、真宗高田派などもともと本願寺と対立していた宗教勢力だけでなく、一部の本願寺門徒までもが反発する事態となっていた⁶⁰。神田氏が

自らの後生の救済を願って帰依した頭如には忠義を尽す一方、軍団の司令官となった一揆首脳部に対しては自らの利害を主張したのであろう。「坊主たちに後生を頼んではいるが、下部のように荷物を運ばされたり、下人のように鎧を担がされる覚えはないへ坊主達は後生をこそ頼みたれ、或ひは下部のごとく荷を持たせ、或ひは下人のごとく鎧をかたねさせ召使はるゝ事一向心得ざる次第⁶¹」という、『越州軍記』に書き留められた土民の声は、越前一向一揆内部の本願寺門徒の声でもあったと思われる⁶²。

と指摘していることに加え、もともとは土一揆であったものが加賀一向一揆の介入によって一向一揆に転じたという特殊な状態が、本願寺門徒でありながら本願寺の指導者に対して反旗を翻す要因になったと考察する。

越前一向一揆に対しても長島一向一揆と同様に大量殺戮を行った。⁶²織田信長であったが、その中身は長島一向一揆とは大きく異なっており、私はこの違いこそが顕如に対してより効果的なパフォーマンスになったと考察する。異なる点は、前述した長島一向一揆の際は一揆衆が立てこもる城内を逃げられないように取り囲んでから放火し、男女二万人を焼き殺すといった無差別な攻撃が見られたが、越前一向一揆においては、長島一向一揆と同様の大量殺戮が行われた一方、織田信長に内応した本願寺門徒や本願寺と対立する真宗高田派などは同じ浄土真宗であっても赦免している。⁶³つまり、浄土真宗の信仰者であっても、敵意がないならば赦す一方、敵対勢力は皆殺しにする容赦のない姿勢を強く示したパフォーマンスであり、織田信長が越前一向一揆を鎮圧したわずか二カ月後の一五七五年(天正三年)十月に顕如が織田信長に対して服属を申し入れた上で和睦した。⁶⁴大きな要因となったと考察する。

まとめると、顕如が挙兵して早々に和睦を余儀なくされた要因は、武田氏の弱体化や一向一揆の壊滅などによって顕如を取り巻く状況が悪化したこと、織田信長の敵対勢力に対する容赦のない弾圧によるものであると考察する。しかし、その和睦が破れるまでの時間は短かった。顕如は敵対していた上杉謙信と和睦し⁶⁵、新たに毛利輝元と同盟を結んで⁶⁶。織田信長との戦に備えた。そして一五七六年(天正四年)四月一日、織田軍が本願寺攻めに向かった。⁶⁷第四章では、石山合戦の終わりから、史実では語られることの少ない晩年の顕如について掘り下げていく。

第四章 石山合戦終結と晩年の顕如

第一節 石山合戦終結と教如との対立

本願寺と織田信長の戦いは最初こそ本願寺優勢だったものの、織田信長直々の出陣で流れを変えられ、二千七百人の犠牲者を出す大敗に終わった⁶⁹。一万三千人ともいわれる本願寺の軍勢に対して織田本隊はわずか三千人であったため、顕如にとってこの敗北は想定外であったことは容易に推測できる。そして顕如はこれ以降野戦をすることなく籠城に徹し、これを受け織田信長は本願寺を包囲して兵糧攻めを行ったが、唯一、大坂湾に通じる線のみ包囲することが出来なかった⁶⁹。

一五七六年(天正四年)七月一三日、毛利配下の村上水軍が海路より兵糧を搬入するため八百艘の大軍で大坂湾に進軍、織田方の水軍が迎え撃った⁷⁰。第一次木津川口の戦いである。戦況について、谷口氏が

数だけでなく、船の装備、操船技術、それに兵器においても村上水軍のほうが数段勝っていた。焙烙火矢という火薬を使った兵器を雨あられと射込まれ、和泉の水軍はあちこちで火災を起こして沈んでいった。(中略)村上水軍はただの一艘の被害もなく戦いを終え、本願寺に兵糧を入れると、悠々と引き揚げていったのである⁷¹。

と解説しているように村上水軍の圧勝であった。本願寺の籠城は村上水軍によって保っていたとっていいだろう。しかし、織田信長は無策ではなかった。配下の九鬼嘉隆に焙烙火矢に耐える大船の建造を厳命したのだ

そして、一五七八年(天正六年)十一月六日、再び村上水軍六百艘が大坂湾に現れ、九鬼水軍の大船六艘と対峙した¹⁵⁰。第二次木津川口の戦いである。戦況について、谷口氏が

はじめは九鬼水軍が押され気味だった。しかし嘉隆は、敵船が近づくのを待って、大砲を発射させた。しかも、指揮官の船に攻撃を集中させ、機動力を麻痺させることに成功した。そして、村上水軍の船が後退するところを、一気に進んで追い散らした。時は正午、九鬼水軍の完勝だった¹⁵¹。

と解説しているように、今度は織田方の九鬼水軍の圧勝であった。この結果によって、本願寺の補給路は断たれてしまった。顕如はその後も一年半粘るが、一五八〇年(天正八年)三月五日に織田信長の提示した和睦を受け入れ、四月九日をもって本願寺を退去した¹⁵²。息子の教如は顕如と対立して籠城を続けるも、八月二日に本願寺を退去し、ここに十年続いた石山合戦が終結した¹⁵³。

ここで疑問となる点は、なぜ教如は顕如が退去した後も約四カ月の間、補給路も断たれており、既に和睦が成立している状況の中抗戦したのだろうか。教如の主張は、蓮如の代から受け継いできた地を安々と織田信長に明け渡してはならない¹⁵⁴というものであるが、なぜ教如は和睦によって教団の存続が約束されている中、石山本願寺にこだわったのだろうか。私は、少しでも有利な条件で和睦したかったがゆえの行動ではないかと考察する。神田氏が

本願寺を明け渡し無防備になればそのまま織田信長に滅ぼされてしまうだろうから、朝廷と信長に訴えて本願寺の存続という約束を獲得したいということである。(中略)後に顕如は門徒たちに説明して、教如の行為

「身勝手な訴訟は度が過ぎてている」と評しているが、顕如・教如共に抗戦続行を訴訟とみている点は共通している⁷⁸。

と指摘するように、籠城が必ずしも徹底抗戦の意思ではなく、朝廷に対しての訴訟の意味合いが存在したことがわかる。実際には教如の目論見通りにはならなかったものの、顕如・教如共に教団存続のために手を尽くしたことが伺える。

最後の節では、顕如の生涯においてあまり注目されていない豊臣政権下における晩年の顕如について掘り下げていく。

第二節 晩年の顕如

その後は織田信長に従っていたが、一五八二年(天正十年)六月二一日、織田信長が有名な本能寺の変によって自害に追い込まれると、顕如はいち早く羽柴秀吉に接近し、その後は各国大名と良好な関係を築くことに力を注いだ⁷⁹。特に、一五八四年(天正十二年)四月に羽柴秀吉が織田信雄、徳川家康と対峙した小牧・長久手の戦いの際には徳川家康から、徳川に味方して参戦し、織田信雄の上洛が実現した暁には大坂の地と加賀を返還するという破格の条件を提示されて支援を求められるが、顕如はこの誘いに乗らず、羽柴秀吉を支持した⁸⁰。ことは、羽柴秀吉に従うという何よりの意思表示であるが、顕如はなぜこれほどまでに羽柴秀吉にこだわったのだろうか。私は、羽柴秀吉が天下を取ること、本願寺の立場が永続的に守られると顕如が判断したからであると考察す

る。その根拠として挙げられる点は、神田氏が

いずれの証言にも一致しているのは羽柴秀吉の母が本願寺門徒であったという点である。(中略)母の信仰が子に大きな影響を与える事例はよく知られていることである。仮にそうだとすると、顕如の秀吉に対する接近は極めて明快な理由によっているように思われる。顕如にとっては、秀吉のような大立者が門徒であることが本願寺教団を維持していく上で重大な意味を持つことはいままでもない⁸¹⁾。

と、羽柴秀吉の母親が本願寺門徒であった可能性を指摘している。この仮説は、一五八九年(天正十七年)二月に、豊臣秀吉から譴責を受けて追放された牢人が本願寺の天満寺内に隠れ住んでいたことが発覚した牢人隠匿事件において、百人以上が処刑されたものの顕如には一切の処罰がなかった⁸²⁾ことから、信ぴょう性のある仮説であると考えられ、顕如が羽柴秀吉にこだわった大きな理由であると考察する。

まとめると、顕如が羽柴秀吉にこだわった理由は、羽柴秀吉の母親が本願寺門徒であり、羽柴秀吉が天下を取ること、本願寺の立場が永続的に守られると顕如が判断したからであると考察する。

その後、顕如は豊臣秀吉から現在の西本願寺の基礎となる京都堀川の地が寄進され、一五九一年(天正一九年)八月三日に移転した⁸³⁾。この移転について、神田氏が

本願寺の歴史を顧みると、約一世紀半以前、第八代法主蓮如の時代には京都東山にあった。比叡山延暦寺との紛争で東山の地を追われ、再び京都近郊の山科に復帰したのは十五世紀後半、しかし十六世紀、顕如の父証如の時代に、本願寺はまた山科の地を去り大坂に移った。その大坂で生れた顕如はさらに紀伊国鷺森、和

泉国貝塚、大坂城付近の天満と移動し、京都に戻ったことになる。このようななりゆきに、顕如がどんな感懐をもったのかは知るよしもないが、父の生れた京都に至ったことに感慨がなかったとは思えない。

と、顕如の心情を考察している通り、父である証如が生まれた地が、顕如の人生最後の地となったことは、感慨深いものであったに違いない。そして、一五九二年(天正二十年)十一月二四日、顕如は病のため五十歳の生涯を閉じた。

その後、本願寺は一度長男の教如が継職し、一年後に豊臣秀吉の命で三男の准如が継職した。これが現在の浄土真宗本願寺派である。豊臣秀吉によって隠居を命じられた教如は、一六〇二年(慶長七年)に徳川家康より七条烏丸に土地を寄進され、ここに東本願寺を創立した。これが現在の真宗大谷派である。

結論

ここまで、顕如の生涯を巡ってきたが、本稿序論で述べた通り、顕如の最大の功績は、この時代に滅亡する大名家も多い中、本願寺史上最大の危機といえる戦国時代に本願寺を守り抜き、現在に東西本願寺を存続させた点であると考ええる。では、なぜ顕如は戦国時代に本願寺を存続させることができたのだろうか。私は、顕如が決して致命傷を負うことのない判断を繰り返し続けたからであると考察する。根拠は、十年にもわたった石山合戦の

最中に本願寺軍と織田軍が直接戦闘を行った回数にある。本願寺軍と織田軍が直接の戦闘を行った回数は十年でわずかに二回にとどまり、どちらも本願寺軍が優位に立っている状態で行っていないのである。一回目は石山合戦開戦時、不意打ちのような形で織田軍を攻撃したものの、二回目は一五七六年(天正四年)の織田軍の本願寺攻めが行われた際に交戦したものであり、前者は織田軍が予期しないもの、後者は圧倒的に本願寺優勢の兵力差があるものであった。このことは、本願寺が滅亡するリスクをなるべく取らなかった顕如の好判断に他ならない。顕如の失策といえる二度目の蜂起の際、服属を申し入れる形で和睦し、事を収めていることや、織田信長が包囲網に最も苦戦していた一五七二年に織田信長と直接交戦していないことから、顕如の目的が織田信長討伐ではなく本願寺を存続させることであり、そのため不必要なリスクを取らなかったことが推測できる。また、この方針は小牧・長久手の戦いの際に羽柴秀吉を支持したことに顕著に表れており、顕如が本願寺を存続させるために最も安全な手を打ち続けてきたことがよくわかる決断である。

以上の理由と事例から、顕如が戦国時代に本願寺を存続させることができたとは考察する。神田氏が、顕如の生涯について

顕如の一生は、父の代から継承した本願寺とその教団を維持するために全力を投入することに費やされた。

(中略)足利義輝・同義昭・織田信長・豊臣秀吉と最高権力者が次々と交代する時代に、本願寺教団を維持し

続けることがどれほどの激務であったかが偲ばれる。

と述べている通り、本願寺史上最大の危機に瀕した時代に本願寺を守り、東西本願寺として現代までつなげたこ

とは、大変な苦勞を伴うものであり、それを勤め上げた顕如は、現代に浄土真宗をつなげた功勞者であることを強く学ぶことができた。なお、題目を『顕如の研究』としたため若干の考察に留めたが、顕如死後の跡継ぎ問題は、現代の東西本願寺の成り立ちを学ぶ上で非常に重要であるため、今後の課題としたい。

コピー厳禁

- 1 神田千里『織田信長』（ちくま新書 二〇一四年）一五九頁
- 2 神田千里『顕如―仏法再興の志を励まれ侯べく侯―』（ミネルヴァ書房 二〇二〇年）一―十頁
- 3 安藤弥「顕如の前半生―本願寺「門跡成」から親鸞三百回忌へ―」金龍静 木越祐馨『顕如―信長も恐れた「本願寺」宗主の実像―』（宮帯出版社 二〇一六年）三七頁
- 4 岩波書店編集部『広辞苑 第二版』（岩波書店 一九七九年）二二六四頁
- 5 神田千里『顕如―仏法再興の志を励まれ侯べく侯―』（ミネルヴァ書房 二〇二〇年）二―三頁
- 6 安藤弥「顕如の前半生―本願寺「門跡成」から親鸞三百回忌へ―」金龍静 木越祐馨『顕如―信長も恐れた「本願寺」宗主の実像―』（宮帯出版社 二〇一六年）三七頁
- 7 浄土真宗本願寺派『増補改訂本願寺史 第一巻』（本願寺出版社 二〇一七年）五七五頁
- 8 安藤弥「顕如の前半生―本願寺「門跡成」から親鸞三百回忌へ―」金龍静 木越祐馨『顕如―信長も恐れた「本願寺」宗主の実像―』（宮帯出版社 二〇一六年）五二頁
- 9 上杉謙信が関東の北条氏攻めを優先したため、実際に挟撃は行われなかった。
- 10 竹間芳明『戦国時代と一向一揆』（文学通信 二〇二一年）一五六―一五八頁
- 11 竹間芳明『戦国時代と一向一揆』（文学通信 二〇二一年）一五九頁
- 12 竹間芳明『戦国時代と一向一揆』（文学通信 二〇二一年）一六〇頁
- 13 谷口克広『織田信長合戦全録』（中公新書 二〇〇二年）四九―五八頁
- 14 神田千里『顕如―仏法再興の志を励まれ侯べく侯―』（ミネルヴァ書房 二〇二〇年）七七頁
- 15 神田千里『顕如―仏法再興の志を励まれ侯べく侯―』（ミネルヴァ書房 二〇二〇年）七八―七九頁
- 16 三好家の家臣である三好長逸、三好政康、岩成友通の三人を指すもの。信長包囲網の一角であった。

- 17 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 九五頁
- 18 大阪本願寺戦争などの名称も存在するが、本稿では一般的に広く知られている石山合戦と表記する。
- 19 神田千里『一向一揆と石山合戦』(吉川弘文館 二〇一九年) 一五七頁
- 20 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 八六頁
- 21 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 九五頁
- 22 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 九六〜九八頁
- 23 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 九八〜九九頁
- 24 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一二六頁
- 25 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一二八〜一二九頁
- 26 浄土真宗本願寺派『増補改訂本願寺史 第一巻』(本願寺出版社 二〇一七年) 五九五頁
- 27 金龍静 木越祐馨『顕如―信長も恐れた「本願寺」宗主の実像―』(宮帯出版社 二〇一六年) 三二四頁
- 28 小谷利明「勅命講和」金龍静 木越祐馨『顕如―信長も恐れた「本願寺」宗主の実像―』(宮帯出版社 二〇一六年) 一六五頁
- 29 神田千里『一向一揆と石山合戦』(吉川弘文館 二〇一九年) 一七五頁
- 30 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一〇七頁
- 31 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一〇九〜一一一頁
- 32 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一一一頁
- 33 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一一二頁
- 34 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一一三頁
- 35 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一一三頁
- 36 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一二〇〜一二三頁
- 37 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一二九〜一三一頁
- 38 神田千里『顕如―仏法再興の志を励まれ侯べく侯―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 八五頁

- 39 神田千里『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 八八頁
- 40 神田千里『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 九〇頁
- 41 神田千里『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 九一―九二頁
- 42 神田千里『一向一揆と石山合戦』(吉川弘文館 二〇一九年) 一七九―一八〇頁
- 43 羽柴秀吉は上月城で特に目立った動きをしていないため、三木城の誤りだと思われる。
- 44 神田千里『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 一七〇頁
- 45 神田千里『一向一揆と石山合戦』(吉川弘文館 二〇一九年) 一八七頁
- 46 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一三三頁
- 47 竹間芳明『戦国時代と一向一揆』(文学通信 二〇二一年) 二〇三―二〇四頁
- 48 竹間芳明『戦国時代と一向一揆』(文学通信 二〇二一年) 二〇四頁
- 49 川端泰幸『一向一揆と織田武士団』金龍静 木越祐馨『顕如―信長も恐れた「本願寺」宗主の実像―』(宮帯出版社 二〇一六年) 九〇頁
- 50 川端泰幸『一向一揆と織田武士団』金龍静 木越祐馨『顕如―信長も恐れた「本願寺」宗主の実像―』(宮帯出版社 二〇一六年) 八七頁
- 51 神田千里『一向一揆と石山合戦』(吉川弘文館 二〇一九年) 一七六―一七七頁
- 52 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一四八頁
- 53 浄土真宗本願寺派『増補改訂本願寺史』(本願寺出版社 二〇一七年) 五九七頁
- 54 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一四八頁
- 55 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一五三頁
- 56 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一三一―一三二頁
- 57 谷口克広『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇〇二年) 一三二―一三三頁
- 58 神田千里『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 一二四―一二八頁
- 59 神田千里『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 二六四頁

- 60 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 一三一―一三三頁
- 61 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 一三五頁
- 62 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 一三九―一四〇頁
- 63 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 一三九―一四二頁
- 64 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 一四四頁
- 65 竹間芳明 『戦国時代と一向一揆』(文学通信 二〇二一年) 二三八頁
- 66 竹間芳明 『戦国時代と一向一揆』(文学通信 二〇二一年) 二二六頁
- 67 谷口克広 『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇二二年) 一五二頁
- 68 谷口克広 『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇二二年) 一五二―一五五頁
- 69 谷口克広 『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇二二年) 一五五頁
- 70 谷口克広 『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇二二年) 一五五―一五六頁
- 71 谷口克広 『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇二二年) 一五六頁
- 72 谷口克広 『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇二二年) 一六一―一六二頁
- 73 谷口克広 『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇二二年) 一六三頁
- 74 谷口克広 『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇二二年) 一六三頁
- 75 谷口克広 『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇二二年) 一六四頁
- 76 谷口克広 『織田信長合戦全録』(中公新書 二〇二二年) 一六四―一六五頁
- 77 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 一九一頁
- 78 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 一九三頁
- 79 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 二一八―二二三頁
- 80 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 二三〇頁
- 81 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 二二五頁
- 82 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 二二五、二四一頁

- 83 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 二四八頁
- 84 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 二四八頁
- 85 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 二四九頁
- 86 金龍静 木越祐馨 『顕如―信長も恐れた「本願寺」宗主の実像―』(宮帯出版社 二〇一六年) 三二六頁
- 87 金龍静 木越祐馨 『顕如―信長も恐れた「本願寺」宗主の実像―』(宮帯出版社 二〇一六年) 三二六頁
- 88 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』(ミネルヴァ書房 二〇二〇年) 二四九頁

参考文献

書籍

- ・ 谷口克広 『織田信長合戦全録』 (中公新書 二〇〇二年)
 - ・ 神田千里 『織田信長』 (ちくま新書 二〇一四年)
 - ・ 金龍静 木越祐馨 『顕如―信長も恐れた「本願寺」宗主の実像―』 (宮帯出版社 二〇一六年)
 - ・ 浄土真宗本願寺派 『増補改訂本願寺史』 (本願寺出版社 二〇一七年)
 - ・ 神田千里 『一向一揆と石山合戦』 (吉川弘文館 二〇一九年)
 - ・ 神田千里 『顕如―仏法再興の志を励まれ候べく候―』 (ミネルヴァ書房 二〇二〇年)
 - ・ 竹間芳明 『戦国時代と一向一揆』 (文学通信 二〇二一年)
- 資料
- ・ 岩波書店編集部 『広辞苑 第二版』 (岩波書店 一九七九年)